

〈随筆〉 マイクロフィルムのおじいさん

中川 豊

今からおよそ十六年前、かつて図書館勤務を始めたばかりの頃の話である。

ある日、頬が瘦けて顎のしゃくった色黒の老人が大股でレファレンス室に入ってきた。左右の腕はやや後ろに垂れている。だが決して威張っているわけではない。少し腰が悪いのか、お腹を突き出してのけ反ることで歩行のバランスを保っているようだった。その姿は私にペンギンを連想させた。

おじいさんは、元気がいい。レファレンスカウンターの丸椅子に腰掛けると、すかさず「伊勢新聞のマイクロを頼む」と大きな声でいつてきた。「マイクロ」というのはマイクロフィルムのこと、伊勢新聞が収録されているマイクロフィルムを指している。図書館には明治十一年以降のマイクロフィルムがほぼ所蔵されており、研究者や郷土史家などがよく利用していた。「昭和十八年四月三日」。色黒のおじいさんは間髪入れず年月日を伝えてきた（年月日は忘れてしまっているので仮である）。「はい。それではこちらの申請用紙にご住所とお名前と電話番号と、ご覧になりたい箇所の年月日を……」と申請用紙への記入事項を伝えていると、「あなた、書いて」とやや低い声でおじいさんはつぶやいた。私は哑然としながらも冷静に「そういうわけにはいきません。マイクロフィルムを閲覧して頂く方には、どなたにも書いていただくことになっていきます。」と、私は教わったばかりのマイクロフィ

ルム利用における館内での規則を伝えた。加えて「そもそも、私が住所なんかを書けるわけがないですよ」と、少しからだちを隠しながら至極当然の理由を付け加えた。しかし、これがまずかった。おじいさんは激高した。

「なにを言つとる！ おまえは戦場へ行つたことがあるんか！ おまえのようなヒヨツ子がエラそうなことをいうな！」

私は仰天した。レファレンス室にいる人たちは、一同にこちらを振り向く。そのとき、ちょうど女性の先輩がレファレンス室に入ってきた。今思うと先輩は私とおじいさんのやりとりを廊下からガラス越しに見ていたのかも知れない。それくらいタイミングがよかった。「いつのことでしたか？」「はい、ちょっとお待ち下さいね」おじいさんと簡潔な会話のやりとりが済むと、先輩はレファレンスカウンターのすぐ隣にあるマイクロ室へ行き、収蔵ケースから求められた年月日のロールフィルムを取り出し、手際よくマイクロリーダーにロールフィルムをセットイングした。私は先輩の後についてその様子を見ていた。早送りで目的の箇所をモニターに映し出すと、先輩は昭和十八年四月三日の一面を一枚プリントアウトした。おじいさんからプリントアウトの要請がないのだから。

レファレンスカウンターではおじいさんが、下唇を突き出し、腰を伸ばしてふんぞり返って座っている。先輩はマイクロ室から出ると「はい、昭和十八年四月三日の記事です」とプリントアウトされた伊勢新聞を手渡した。おじいさんはやや体を左に傾けて右のズボンのポケットから十円玉を取り出して、先輩の手のひらに落とした。すると先輩は「はい、どうぞ」といって、すかさずおじいさんにハサミを手渡した。するとおじいさんはA3の用紙の縁をジョキジョキ切り始めた。プリントアウトされた用紙の縁はトナーで黒い。そのトナーで黒くなっている幅一センチくらいを切り取っているのである。先輩が何も言われずにハサミを出したのは、きっといつもの行動なのであろう。先輩が両手で切りくずを受け取るとおじいさんは、すつくと立ち上がり用紙を三回ほど折り畳んでポケッ

トに入れて帰って行った。時間にして約五分くらい。無駄な会話と動きがない絶妙なやりとりであった。しかし、私が教わったマイクロフィルム対応のマニュアルとはまるで違っていた。

後から先輩から聞いたことは、あのおじいさんは、ときどきやって来て伊勢新聞のマクロフィルムから特定の年月日を指定して、その第一面をプリントアウトして帰るといったことだった。ちよつとおつかないところもあるけど、パターンは同じだから対応しやすいわよ、ということだった。先輩も最初は申請紙の記入を求めたが、書く気がないのか、あるいは書けないのか、一向に記入してくれないので仕方なく申請者の名前や住所の部分は空欄にしたまま年月日とプリントアウトの枚数だけこちらで記入しているということだった。本来であれば、閲覧の申請用紙を提出してもらい、かつ自身でフィルムを閲覧して特定の箇所がきまれば、今度は複写のための申請用紙を提出してもらおう。そして料金を払ってもらいプリントアウトしてもらおうというのが手順である。ところが、それを職員任せにして、ハサミまで借りて黙って帰って行く。不遜な老人だと私は感じた。そもそも戦場へ行つたことはあるか、とはどういうことだ。おかしいのではないか。単に記入が面倒なだけなのだ。私はこの傍若無人な老人が不当にも図書館において特別扱いされている点と、不条理にも怒鳴られたことに対する異議を幾度も心中で巡らせていた。私は心の中の利用者ブラックリストに、この老人を第一号として刻み込んだ。

それから、どれくらいたつたらうか。例の老人が失踪した。私は身構えた。だが、以前とは様子が大きく違っていた。「申し訳ないが、昭和二十四年九月三日の伊勢新聞がほしい」

と謙虚に言うのである。あまりもの変化に拍子抜けした私は、ともあれ先輩がしたように求められた年月日が収録されているマイクロフィルムをリーダーにセットして、目的の箇所を特定して、プリントアウトをして、用紙を渡した。

「えらい、お手数をかけたな」

と、おじいさんは謝辞を述べて十円を渡した。やはり全然違う。すかさず私がハサミを手渡すとおじいさんは、やはりジョキジョキと縁を切り始めた。

「おおきに」

という言葉を残し、帰っていった。ここまでくるとちよつと怖かった。

この変化は何か？ 推測するに先方でも言い過ぎた、という反省があったのではないかと私は捉えた。その後おじいさんは何度か訪れたが、やはり、かつての大声を発する身勝手なおじいさんは影を潜め、相変わらず申請用紙は書いてくれないものの、謙虚な態度であった。私にも変化が訪れて、おじいさんが訪れるたびに積極的に「今日はいつでした？」とこちらから尋ねるようになった。なるべく素早い資料提供も心がけた。もちろんハサミも忘れなかった。

それからもおじいさんはやって来た。しかし、来るたびごとに歩き方が遅いのである。ズボンのチャックが全開という時もあった。日付を伝える声も弱々しい。用件は相変わらず伊勢新聞のプリントアウトであったが、特定の年月日を口頭で伝えるのではなく、紙に書かれた年月日を渡すようになった。椅子に腰掛けるなり「あーしんどいわ」と誰に聞かせるわけでもなく呟いて、肩で大きく呼吸するようになった。おじいさんは三ヶ月に一度くらいのペースで来ていただろうか。体力の衰えは、レファレンスに来るたびごとに明らかであった。

最後におじいさんを見たのはいつの頃だったろうか。初めてのあの出会いから三年くらいたった頃だろうと思う。気がついたらいつの間にか来ていなくなったという認識しかない。そして、もう来ない、いや来られないんだな、ということが半ば私の中で確信となった頃、そもそもあのおじいさんは、何のために特定年月日の新聞が必要だっ

たのか、という疑問を私は初めて持った。私はその点を確かめるべく例の先輩に尋ねてみると、「誕生日みたいよ」ということであった。よく呑み込めないので続けて聞くと「あのおじいさん、誰か知り合いになつたらその人の誕生日を聞き出して、その年月日の伊勢新聞の第一面をあげてるんだって。前にいた人に聞いたわよ」という返事であった。先輩は勤務十年以上のベテランである。すると十年以上も、いや、もつと以前からおじいさんは、新聞のプレゼントを続けていたのだろう。私はおじいさんが戦場でのような目にあつたのか、もちろん知らない。極限状態をくぐり抜けて来ているのかもしれない。そのような経験から「命」に対するより深い意識を持っていたのではなからうか。祝福されるべき誕生日に、その記念すべき日の新聞を送る……。私はおじいさんに対する強い敬服の念が湧いていた。もう一度、あのおじいさんに会いたいと強く思った。

さて、利用者が申請書を書かずに資料閲覧や複写を求めてくるのは確かに問題である。また、図書館員がそれを見過ごして対応することも問題ありとの非難を浴びせかけられるかもしれない。しかし、私は、あのおじいさんに対しては、先輩の対応でいいと思つている。何かで読んだが、人間には「袋のマチ」のようなものが必要で、マチは広ければ広いほど人間的に寛容になれるのだという。私はそれを優しさだと考える。組織においても同様にマチは必要であると捉えたい。いつもお決まりのマニユアルを金科玉条のように守るのではなく、一人一人の利用者にふさわしい対応を心がけて、場合によっては変更や例外を認めるニュートラルな心持ちでありたい。肝心なのは来館者には、図書や情報を持ち帰ってもらうだけでなく、気持ちよく帰ってもらいたいという点にある。職員は「袋のマチ」を結集して、組織としての大きな「袋のマチ」を作り出して利用者に柔軟に対応して、職員はもちろん、利用者も共に心地よい空間を作り出すための努力が必要であるように感じる。